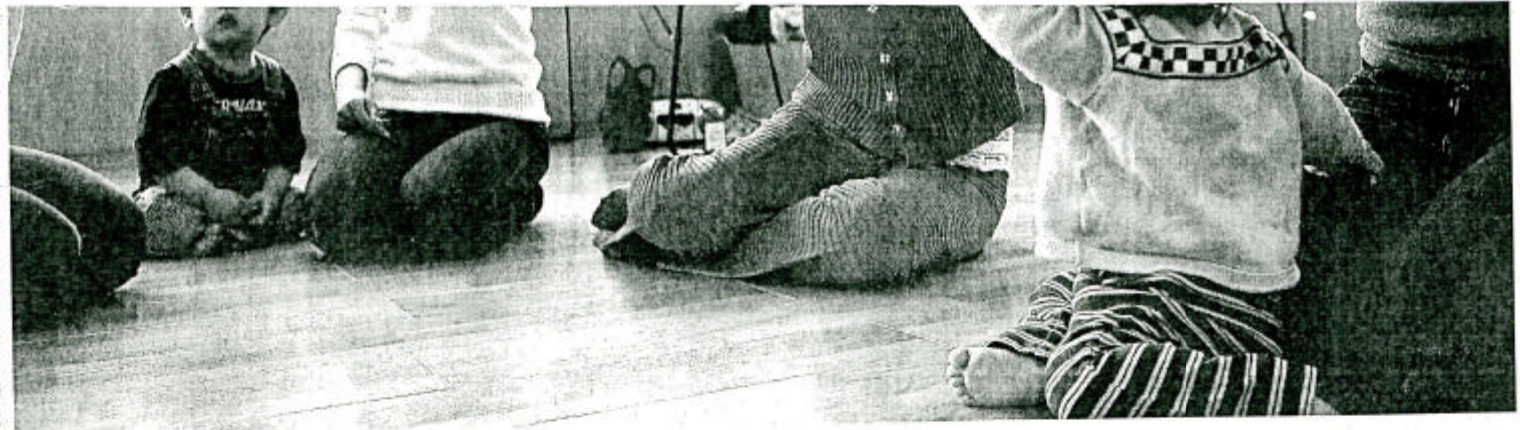


■プロフィール

横浜市生まれ。高校卒業後、三菱重工業に就職。32歳で留学、豪州の市場調査会社で働き、73年に起業。主力は一般事務派遣で7割が女性。売上高2367億円、当期利益53億円(08年8月期連結)。米フォーチュン誌の「世界最強の女性経営者50人」に8年連続選出。(写真は08年、東京・青山のオフィスで)



子を忘れて子どもたちとの遊戯を楽しんだ「東京・代々木



# 働き方広げた自負と戸惑い

たゞざるなら長距離ランナー。「ハケン」という言葉もない時代、秘書やタイピストを企業に送る事業を始め、売上高2千億円の企業に育てた。格差問題や不正行為の摘発など、議論を取り巻く環境は厳しいが、創業の志は変わらぬ。

——派遣は格差の温床との批判が高まり、規制強化される方向です。業界のバイオニアとしてどう思いますか。

戸惑いはあります。うちに登録するスタッフのニーズはさまざま。子育てや介護を抱えて働く時間を限定したいという女性が多いし、「勉強したいので残業がない仕事を」「自分に合う仕事が見つかるまで」という人もいます。正社員化が前提の仕事もある。求める人がいて働けてきたので今の状況は残念です。

——同じ派遣業の日雇い派遣に見られる劣悪な雇用環境や法令違反は問題です。

仕事を失い、明日の生活に困る人もいます。ああいう働き方も必要でしょうね。でもピンハネや労災隠しは論外。利益を急いだ結果でしょうが、そもそも派遣業はそれほどもうかるビジネスではありません。顧客は神様でスタッフはお嬢様。単価を下げる企業は要請に応えたくても、スタッフに支持されないと始まりません。教育や福利厚生も欠かせない。

——ではなぜ、このビジネスを始めたのですか。

海外で女性が生き生きと働く姿を見たり、男社会の日本の会社に戻る気になれなかったの。そこで考えたのが向こうで知った「テンポラリースタッフ」。同僚が休暇に入る時、見知らぬ女性がやってきて仕事を引き継ぎ、あの便利な仕組みを日本でやってみよう。

みよ子

——頑張りましたか。

86年の労働者派遣法施行までは「事務サービス請負」の扱い。職業安定所から何度も注意され、やめたかったけれど、「企業やスタッフに「次もぜひ」と頼まれ、思い直す。その繰り返しです。人にかかわる仕事でなかったら続けてこなかったでしょうね。

——30年前の「派遣」は職場でどんな扱い？

英語で電話応対したり、外国人上司の指示を聞いてタイピングをしたりするスペシャリスト集団です。当時、女性の就職先は限られ、結婚すれば家庭に入るものだった。働きたい女性と、男女の別なくよい人材が欲しい企業とをつなげることで、女性の働き方の幅を広げた自負があります。

——派遣のイメージは大きく変わりました。

日本ではIT技術者もベテラン秘書も「ハケンさん」と呼ばれる。おかしな話です。海外では仕事を聞かれて「派遣です」なんて言わない。仕事の中身を答えます。職務や技能に応じた賃金の基準が明確なので、雇用形態の差は重要ではないんです。

——逆風でも人材ビジネスに挑戦し続けるんですね。人口減社会になっても日本の労働力はフル活用されていますよね。いまだに結婚や育児を理由に労働市場から遠く女性が多いのは、家庭と両立できる「働き方」がまだ社会に認知されていないから。

いま郊外の住宅地に拠点を増やし、子育て中の女性向けに短時間の仕事を紹介しています。今も昔も、働きたい人が働きたい時に働ける社会が理想なんです。

be between

文・後藤絵里 写真・東川哲也

be between  
 〓意見・感想はbe@asahi.com  
 発行所 朝日新聞社  
 〒104-8601 東京都中央区区役所0-0-01  
 電話03-55626-013

友達に会いたくなく、髪をいじらない

うす毛治療の体験記はこちら

エージーエー体験記



夢の鉄道時計を手に、はるか宇宙の彼方へ——いよいよ発車時刻です。

2008.7.12 朝日新聞

ランニング社長 篠原敏子談